

令和2年度 南アルプス市立若草小学校 学校評価 前期自己評価書

南アルプス市立若草小学校
校長 名取 和仁

1 学校評価について

1 学校評価の目的 …学校評価ガイドライン（H28改訂版）より

- ① 各学校が、自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- ② 各学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ③ 各学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

2 評価方法

(1) 評価・アンケート項目について

学校教育目標・目指す学校像・めざす児童像・めざす教職員像等を指針として、以下の分類の中より評価及びアンケート項目を設定し、教職員による自己評価、並びに児童・保護者に対してのアンケートにより回答を得た。

- ① 教職員自己評価：「学校生活」「学習指導」「家庭学習」「生徒指導」「学校経営」「研究・研修」「施設・設備・安全管理」「家庭・地域との連携」
- ② 児童アンケート：「学校生活」「学習指導」「家庭学習」「生徒指導」「携帯電話」
- ③ 保護者アンケート：「学校生活」「学習指導」「家庭学習」「生徒指導」「施設・設備・安全管理」「家庭・地域との連携」「携帯電話」

(2) 分析・考察に向けての評価基準

- ① 各項目について、下表の4段階で評価・回答を得た。4と3の評価・回答を合わせて肯定的意見(プラス評価)、2と1の評価・回答を合わせて否定的意見(マイナス評価)としてとらえた。

4：そう思う	3：どちらかというと思う	…肯定的意見(プラス評価)
2：どちらかというと思わない	1：そう思わない	…否定的意見(マイナス評価)

- ② 各項目の平均値(少数第1位まで)を算出し、下表のように設定したカッティングポイントを判定基準ととらえるなかで、分析・考察につなげた。

[カッティングポイント]

3. 0以上	… A(良好である)
2. 9～2. 5	… B(概ね良好ではあるが、工夫・改善の余地がある)
2. 4～2. 1	… C(工夫・改善が必要である)
2. 0以下	… D(根本的に工夫・改善を図る必要がある)

上記(1)の評価項目について、(2)の評価基準に照らし合わせながら、各学年による検討を行い、それを基に全体を通しての分析・考察を実施することにより評価結果とした。

2 前期自己評価結果（自己評価書）

1 本年度の学校教育目標，めざす学校・児童・教職員像について

【学校教育目標】 ①かしこい子ども ②美しいものに感動する子ども ③思いやりのあるやさしい子ども ④たくましく生きぬく子ども

<めざす学校像>

- ①児童にとって楽しく希望にあふれ充実した学校
- ②保護者にとって信頼できる学校
- ③地域にとって開かれた学校
- ④教師にとって創意が生かされ働きがいのある学校

<めざす児童像>

- ①授業に集中する子ども（話を最後までしっかり聴くことのできる子ども）
- ②気持ちのこもったあいさつができる子ども
- ③一生懸命にそうじができる子ども
- ④体育や休み時間に元気に活動できる子ども

<めざす教職員像>

- ①使命感と情熱にあふれる教職員
- ②児童と真剣に向き合い心を理解できる愛情あふれる教職員
- ③豊かな人間性と教養，専門的知識を兼ね備えた教職員
- ④保護者及び地域の期待に応え，信頼される教職員

<その他の重点事項>

[若草中学校区における小中一貫教育の推進（南アルプス市推進事業）]

- ①若草中学校との一貫した教育への取り組み（縦の取り組み）
- ②若草南小学校との連携した教育への取り組み（横の取り組み）

2 教職員自己評価，児童アンケート，保護者アンケートについて

令和2年7月に、学校職員による自己評価（資料1），及び児童によるアンケート（資料2），保護者によるアンケート（資料3）を実施し，その質問項目と集計結果を，資料1～3に示した。前期学校評価は，昨年度まで6月中旬に行っていたが，新型コロナウイルス感染防止対策（以下，新型コロナ対策）による臨時休校の長期化の為，学校の再開が先送りされたことにより，1カ月ほど時期を遅らせての実施となった。

今年度は，自己評価・アンケートの各項目内容を，指針となる「学校教育目標」及び「めざす学校像」等に，より密接に沿ったものとなるよう見直しを図った。また，小中一貫教育推進に向けた横の取り組みを意識するなかで，できる限り若草南小学校との共通項目をいかせるよう調整した。それに伴い，項目数も精選し，自己評価項目は，昨年度の26項目から17項目に，保護者アンケート項目は，同19項目から11項目（携帯電話に関する項目を除く）に絞り，より焦点化・明確化された評価に近づけられるよう心がけた。なお，評価内容に責任をもてるよう，いずれも記名式として回答を得た。

評価・アンケート項目のうち，「学校行事」に関わるものについては，新型コロナ対策により，ほとんどの活動が実施できていないため，前期評価の項目からは割愛してある。また，「携帯電話」に関わるアンケート項目については，市内小中学校で統一した内容とし，児童・保護者それぞれより回答を得た。なお，保護者アンケートの回収率は，ほぼ100%となり，本校への関心や協力姿勢のあらわれであることがうかがえる。今後とも家庭と学校の連携を一層深め，教育活動を推進していきたい。

3 評価と改善策

(1) 全体的な評価の概略

職員による自己評価の結果は、全17項目が肯定的回答率100%のA判定であった。この結果から、本校の教職員が、学校教育目標やめざす学校像等（以下、学校教育目標等）を十分に意識して教育活動（職務）の遂行に努めていることが見てとれる。学校教育目標等については、年度当初に校長より提示され、始業式や終業式などの場では、児童に向けても投げかけられている。これにより、教職員はより良い学校づくりに向け、一層の意識づけが図られている。

しかしながら、昨年度の評価結果より0.2～0.3ポイント下がっている項目も多くみられた。これについては、前述したとおり学校教育目標等により密接に迫った項目内容としたことが1つの理由とも考えられる。例えば、昨年度の「子どもたちが、楽しく学校生活を送れるよう努めている」に対して、今年度は「児童が、楽しく希望にあふれ充実した学校生活を送れるよう努めている」とした。確かに内容レベルが上がってはいるが、学校教育目標等の達成に向け、真摯な姿勢で一層の努力を重ねていきたいと考える。また、別の理由として、新型コロナ対策による学校再開の遅れや児童との接触機会の減少も大きな一因としてとらえることができる。この点については、今後新しい生活様式での学校生活を実践していくなかで、しっかりと取り戻していきたい。

評価がやや低めな項目として、**5**「元気に活動できるよう努めている」(3.6)、**8**「家庭学習定着の手立てと工夫」(3.5)、**12**「特別支援教育の充実」(3.5)、**15**「緊急時対応への共通理解と安全への配慮」(3.6)が挙げられる。いずれもA判定ではあるが、**5**の項目については、新型コロナ対策により児童に十分な活動をさせてあげられないもどかしさが表出されたものととらえられる。**8**の項目については、3の回答が50%を占めていることから、家庭での取り組みの様子に自信をもって評価できていないことがうかがわれる。**12**の項目についても、上記と近い割合で3の回答がみられる。校内支援体制の充実という点では、人的な制約もあり、自信をもって評価しきれない現状が見てとれる。校内研究などを通じて、特別支援教育についての理解を一層深め、個々の力量を上げていく必要もある。**15**の項目については、やはり新型コロナ対策の為、1学期には避難訓練なども十分に実施できていない点が評価に表れているといえる。2学期以降の取り組みを通じてこれまでを補いながら、さらに安全への意識を高めていきたい。

児童アンケートの結果についても、携帯電話に関する項目を除く全11項目がA判定となる回答であった。新型コロナ対策による影響が少なからずあったことと思われるが、いずれの項目も昨年度と同程度の評価となっている。なかでも、**6**「学校の授業はわかるか」の項目については、昨年度前・後期の結果を0.1ポイント上回る3.7であった。昨年度末からの新型コロナ対策による学習の遅れを何とか取り戻そうと、教職員もこれまでにない工夫を凝らしながら授業に臨んでいる姿勢が、児童にも伝わってきているのではないだろうか。

一方、**3**「自分から進んであいさつをしているか」、**10**「学校で困ったとき相談できる人がいるか」の項目については、ともに90%ほどの肯定的な回答を得てはいるものの、昨年度に続いて3.5と他の項目に比べるとやや低い評価が再現された。一層の改善に向けた取り組み方法の検討が課題とされる。

保護者アンケートについても、携帯電話に関する項目を除く全11項目がA判定となる回答であった。項目により多少のばらつきは見られるものの、概ね昨年度と同傾向の回答状況であった。学習に関わる項目では、**4**「基礎基本の定着やつまづきへの対処」で昨年度を0.2ポイント上回る3.4の評価となっており、児童アンケートでの「学校の授業がわかるか」

の項目評価と傾向が一致している。逆に⁵「家庭での学習習慣」の項目では、昨年度前期に比べ0.2ポイント、後期からは0.1ポイント下回り3.1の評価となった。4と回答した保護者も約33%と少ない。新型コロナ対策による休校期間が2カ月近くに及ぶなか、家庭における学習に不安を抱かれた保護者も多かったことと予想される。また、保護者によって家庭学習のとらえ方（宿題の要・不要など）にも温度差がうかがえた。⁸「教育活動に適した施設・設備」の項目については、昨年度を0.1ポイント下回る3.2であり、4と回答した保護者も約34%であった。古い施設である為、日々修繕を繰り返しながら教育活動を進めているが、老朽化は年を追って進む為、やむを得ない状況ではある。なお、1学期は新型コロナ対策により保護者に学校（校舎内）に出向いていただく機会がほとんどもてなかった為、施設・設備について回答しかねた保護者もかなりみられた。¹⁰「情報提供」の項目では、昨年度前期よりも0.1ポイント、後期からは0.2ポイント上回る3.6の評価となった。休校中も含め、ホームページや学校メール、また学年・学級のたより等による情報提供が高評価を得たものと推測される。逆に、¹¹「家庭・地域の相談や要望への対応」については、昨年度前期に比べ0.1ポイント、後期からは0.2ポイント下回り3.4の評価であった。すべてを新型コロナ対策による影響であると断言はできないが、各種の儀式的行事をはじめとする学校行事、並びに授業参観などに一切保護者や地域の方々を招き入れることができなかつたこれまでの振り返ると、評価への影響は否めないものと思われる。

以上が前期学校評価の全体的な概略であるが、この結果については、教職員全体で真摯に受け止め、共通理解をもって改善に努め、2学期以降の教育活動に生かしていきたい。

※携帯電話の項目については、市で統一した内容での調査の為、全体的な評価の概略からは除外してある。

(2) 分類毎による項目の評価と改善策

I 学校生活について [対象：教職員・児童・保護者]

【考察】

自己評価、アンケートともにいずれの項目についてもA判定であり、概ね良好な学校生活を送られている状況をうかがうことができる。ただし、「あいさつ」の項目についてみると、自己評価では3.8であるものの、児童アンケートでは3.5、保護者アンケートでは3.2と他の項目と比べると低い値となっている。アンケートで4と回答した割合をみても、児童は59%程度（肯定的回答率約90%）、保護者では35%（肯定的回答率約82%）と十分満足な状況とはいえない。この項目については、昨年度にも課題とされたところでもある。新型コロナ対策により、身近で大きな声を出すことに制約のある現状ではあるが、大切な生活習慣の一つでもある為、より良好で満足のできる状況を目指していきたい。

【改善策】

校内では、高学年を中心に気持ちのよいあいさつのできる児童が増えてきている。児童会活動によるあいさつ運動等を手立てとして、中学年・低学年へとあいさつの輪を広げていけるとよい。小学校での生活期間が浅い低学年では、あいさつの意義をわかりやすく伝え、コミュニケーションの基となるあいさつの良さや重要性を啓蒙していくことにより、家庭や地域においても進んであいさつのできる児童を育てていきたいという意見もみられた。また、地域の「見守り隊」に協力をいただくなかで、安全確保に加えてあいさつの推進にも継続して取り組んでいきたい。

Ⅱ 学習指導・Ⅲ 家庭学習について [対象：教職員・児童・保護者]

【考察】

自己評価、アンケートともにいずれの項目についてもA判定であり、概ね良好な学習活動が進められている状況をうかがうことができる。特に「学習指導」の項目については、児童・保護者ともに昨年度を上回る回答を得られた。全体的な評価の概略の項でも述べたが、新型コロナ対策による学習の遅れを取り戻すべく、教職員も学習内容の精選等これまでにない工夫と教材研究を重ね、授業改善に取り組んできた成果が評価にも反映されているように思われる。「家庭学習」の項目については、保護者の評価が3.1であり、4の回答率が約33%（肯定的回答率約81%）と他の項目に比べて顕著に低い。学校での宿題の提出状況はいずれの学年も良好であるが、家庭での自主学習の取り組み状況については個人差が大きいといえる。また、家庭学習のとらえ方（宿題の要・不要など）には、保護者によっても違いがみられる。しかしながら、学力向上に向けての家庭学習の有効性については、学力学習状況調査の結果からも明らかであり、県教育委員会でも「家庭学習習慣化促進事業」として推進を図っていることから、より効果的な取り組みとなるよう方策を検討したい。

【改善策】

授業改善に向けては、今後も「学びのサイクル改善事業」等を活用しながら、PDCAを意識した取り組みを図っていく。また、2学期より新たに導入されている「学力向上支援スタッフ」の力も借りながら、一層充実した学習環境を築いていきたい。家庭学習については、学年段階に応じて、低学年では学習内容や取り組みの仕方についてたより等で紹介し、家庭の協力も得ながら連携して学習習慣が身につけられるように進めていく。また、児童の実態に応じて、宿題の質や量についても調整を図る。中学年では、宿題等についてはほとんどの児童がしっかりこなせてきているので、個々の興味関心や課題に沿って自主学習に取り組めるよう手立てを図る。高学年については、日常的な自主学習習慣が身につけられるよう、取り組み方に工夫のみられた児童や継続して取り組んでいる児童を励ますなどの声掛けを行うなどして、自発的な学習に結びつけていきたい。

Ⅳ 生徒指導について [対象：教職員・児童・保護者]

【考察】

自己評価、アンケートともにいずれの項目についてもA判定であり、児童の規範意識も育ってきており、教職員が児童理解に努めるとともに、いじめや問題行動への対処も完全とはいえないものの適切に行われている状況をうかがうことができる。しかしながら、児童アンケートの結果より「学校で困ったとき相談できる人がいるか」の項目については、否定的回答率が10%近くある点は見逃せない。あくまでも個人的対応となる要素の強い部分ではあるが、対応策を考えていく必要がある。

【改善策】

学校では、教科化された道徳の時間にはもとより、教育活動全般を通して豊かな心の育成に取り組んでいる。新型コロナ対策の為、行事や学級での活動を十分に実施することはできなかったが、今後は新しい生活様式のなかで、取り組みうる仲間づくり・集団づくりの活動を取り入れていきたい。また、毎学期に実施している学校生活アンケート（いじめアンケート）をもとに、児童一人ひとりに寄り添い、問題点の解決に向け粘り強く対応していく。1学期に実施した学校生活アンケートによると、昨年度に比べ、いじめの認知件数は大幅に減ってきている現状である。さらに、QUの実施結果から得られた情報を活用しながら、気になる児童には積極的に聞き取りを行うなどして、いつでも児童が話しかけられるような雰囲気づくりと親身な対応を心がけていきたい。これからも、学校での児童の様子や指導した内容を適時に家庭へも伝えることにより、学校と家庭の連携を一層深め、同一歩調で児童の成長を支えていきたい。

V 学校経営・VI 研究研修について [対象：教職員]

【考察】

自己評価の結果、いずれの項目についてもA判定であり、共通理解をもとにした良好な学校経営がなされ、校内研究などにも真摯に取り組んでいる状況をうかがうことができる。本校では、5つの特別支援学級を設け、19名の児童が在籍しているが、在籍児童ばかりでなく、支援を必要とする児童は通常学級にも多数いる。必要に応じて、また状況に応じて校内での支援体制を整えているが、人的な限界もあり十分満足であるという評価に至らず、3.5という他の項目と比べてやや低めの評価になったものと推測される。

【改善策】

今後も共通理解のもと、互いに連携を図りながら学校づくりと研究の推進に努めていきたい。なかでも特別支援教育に関わっては、校内研究でも計画的に取り上げることにより、教職員全体で力量を高め一層充実した教育活動を進められるようにしたい。また、新たに導入される「学力向上支援スタッフ」を適所に配置することにより、局所的な過重負担を減らし、広く支援の行き届く学習環境を目指していきたい。

VII 施設設備・安全管理について [対象：教職員・保護者]

【考察】

自己評価、保護者アンケートともにいずれの項目についてもA判定の評価であった。しかしながら、保護者アンケートの「教育活動に適した施設・設備」の項目については、昨年度を0.1ポイント下回る3.2であり、4と回答した保護者も約34%と低い割合であった。古い施設である為、日々修繕を繰り返しながら教育活動を進めているが、老朽化は年を追って進む為、やむを得ない状況ではある。安全管理に関わっては、地域の「見守り隊」に協力いただくなかで、登下校中の安全確保に努め効果を上げているが、校内では新型コロナ対策の影響により1学期の避難訓練が見送られたこともあり、評価がやや低い状況になったものと推測される。

【改善策】

老朽化も著しくなっている校舎ではあるが、可能な限り修繕等を行いながら、校舎や施設を大切に利用していきたい。また、長寿命化対策に向けての計画も検討段階に入ることが予想される為、スムーズに、また柔軟に対応できるようにしていきたい。安全対策については、今後も継続して「見守り隊」に協力をいただくなかで、登下校中の安全確保に努めていく。1学期に実施できなかった避難訓練等については、2学期以降の取り組みを通じてこれまでを補いながら、さらに安全への意識を高めていきたい。

VIII 家庭・地域との連携について [対象：教職員・保護者]

【考察】

自己評価、保護者アンケートともにいずれの項目についてもA判定であり、肯定的回答率も97%以上となり、概ね良好な連携が図られていると読み取ることができる。保護者アンケートによると「情報提供」に関わる項目では昨年度を上回る評価となった。休校中も含め、ホームページや学校メール、また学年・学級のたより等による情報提供が高評価を得たものと推測される。逆に、「家庭・地域の相談や要望への対応」については、昨年度を下回る結果となった。新型コロナ対策により各種行事や授業参観などに一切保護者や地域の方々を招き入れることができなかった点が評価にも反映されているのではないかと推測される。

【改善策】

今後も、様々な媒体を利用しながら、適時・的確に情報提供に努めていきたい。また、新型コロナ対策により、昨年度同様の形態での実施は困難であろうが、2学期以降については、新しい生活様式を踏まえるなかで、保護者や地域の方々を学校にお招きする機会や、相談及び要望に対応する場面を、知恵を集め工夫を加えるなかで設けられるようにしていきたい。

携帯電話について [対象：児童・保護者]

昨年度は児童についてのみアンケートをとったが、今年度は保護者についても回答をいただいた。所有率については、児童の回答で44.1%（昨年前期46.1%）、保護者の回答で29.8%という結果であった。本来なら両者の数値は一致すべきところであるが、保護者アンケートの欄外記載のコメントから予測するに、「兄弟で共有している」状況や「インターネット接続不可の機種」等を含めていない場合がある為、両者に差異が生じているのではないかと考えられる。児童の回答を対象に見ると、所有率は4年生以上では50%を上回り、6年生では7割近くが所有していることになる。

ルールの有無についてみると、児童の回答で85.3%（昨年前期70.8%）、保護者の回答で92.9%が家庭で使い方のルール決めているという回答結果であった。昨年度に比べ、ルールを設けている家庭が15%ほど上回っている点は、望ましい傾向であるように思われる。しかしながら、本アンケートより先に生徒指導主任より出された「ゲーム・インターネット・携帯電話のルール作りについて」の回答結果によると、ほぼ100%ルール内容が記載されて提出されていたにもかかわらず、本アンケートの回答結果との差異が生じており、気になる点である。また、所有率と同様に、児童と保護者の回答において8%ほどの差がみられる。アンケート・質問項目の文言の違いによる受け取り方も異なってしまう場合がある為、今後検討の余地を残すが、保護者はルールを決めているつもりでも、児童はそれほど意識していないケースも考えられるので注意が必要である。

携帯電話やスマホ等、とくにインターネットやSNSを利用する際における問題点は、全国的に毎年指摘されている状況にある。本校でも、家庭と連携しながら、より有効で安全な利用の仕方について、折に触れ指導していきたい。

□携帯電話(またはスマートフォン)所有率

(%)

	全校	1年	2年	3年	4年	5年	6年
児童	44.1	25.8	21.1	47.3	51.3	48.9	68.7
保護者	29.8	4.5	13.3	29.7	32.1	41.5	54.5

□携帯電話(またはスマートフォン)のルール

(%)

	全校	1年	2年	3年	4年	5年	6年
児童	85.3	87.0	68.4	74.3	82.5	87.0	95.6
保護者	92.9	100	91.7	90.9	96.0	97.4	88.9